

木曽森林環境保全ふれあいセンター

これまでの取組(2005年7月～9月)

(2005年7月)

・木曽山林高校生生徒が職業体験

木曽山林高校(木曽福島町)の林業科の2年生6名が、7月27日～8月2日までの(土、日曜日除く)5日間、木曽森林環境保全ふれあいセンターの指導のもと、就業体験にチャレンジしました。この就業体験は「ずく出せ修行」と言い、長野県教育委員会が特別活動の一環として昨年度から実施しているものです。

体験期間中は、城山国有林での歩道の整備や、長野県西部地震の被災跡地での植生状況調査等を行いました。

初日には、作業に入る前の安全指導と草刈り鎌などの道具の整備を行いました。指導した当センター鷹野所長は、「切れる刃を付けることが基本であり、作業を楽にすることにもつながる」と説明し、砥石に当てる角度などについて詳しく教えました。

また、最終日には、6名全員に感想文を書いてもらいましたが、その中で生徒たちは、調査は、6名一緒に行ったため、段取り、チームワークが大事だということがわかった。

チーム作業では、自分の意志を伝えることの重要性がわかった。

実習が沢山あるので、今回の体験を参考にしながら安全な作業を行えるようにしていきたい。

5日間の体験を通して、スタミナ不足を痛感したので、体力を付けようと思った。

この「ずく出せ」就業体験で学んだことを、学校生活や将来就職するときに役立てたい。

将来は、森林関係の仕事に就こう考えている。

などと述べていました。

今回の体験が、将来社会に出た時に役立つ貴重な体験となることを願っています。



【2005年8月】

・木曽谷地域の小中学校教職員が森林・林業を体験学習

8月4日、木曽森林環境保全ふれあいセンターと木曽地方事務所が合同で、木曽谷地域の小中学校教職員を対象とした森林・林業体験学習会を、19名の参加を得て木曽福島町、城山国有林及び上松町小川入り国有林「赤沢木材利用等展示エリア」で開催しました。

本学習会は、森林・林業などについて教える教職員の方々に、実際に森林に触れ、作業を体験し、森林・林業への理解を深めるとともに、総合学習などのプログラム作成の際などの参考にしていただくことを目的に実施したものです。

午前中は、木曽福島町の「城山史跡の森」で、遊歩道沿いでの動植物の観察、森林の機能、木材の活用、木曽谷における森林と林業などの学習を行いました。

また、午後からは、上松町の「赤沢木材利用等展示エリア」で、間伐作業を行いました。ここでは、作業に先立ち「作業の安全確保」や「のこぎり、鉋などの道具の使用方法」の説明を受けた後、間伐作業を実施しました。

参加した教職員からは、「普段は山に入る機会も少ないので、自然観察、間伐作業などすばらしい体験ができた」という意見も聞かれました。

最後に、天木指導普及課長から、「今回の経験を元にして、子供たちの教育に森林・林業を取り入れて下さい」との挨拶があり、その日の行程を締めくくりました。



・長野県西部地震の被災跡地で愛知の高校生が除伐体験

1984年の長野県西部地震で大規模な土砂崩落のあった王滝村の御岳山山腹で、8月9日、愛知県立阿久比高校(阿久比町)の生徒72名と先生5名が、木曽森林環境ふれあいセンター、木曽森林管理署職員の指導のもと除伐作業による森づくりを体験しました。

作業を行った濁沢は、震災当時、沢筋全体が土砂に埋ってしまったところで、それ以来、ボランティア等によりヒノキ、サワラ、ミズナラ、カンバ、ヤマハンノキ等による植生復元が進められてきました。今回は、ヒノキなどが深く根を張って育つよう、直径10センチ程になったヤマハンノキなどの一部除伐を行ったものです。

本作業は、阿久比高校によるボランティア活動の一環として実施されてきたもので、今年で9年目になり、参加者は延べ730名に達しています。

参加者の中には、2年目、3年目の参加者もあり、「高校生活の中で一番印象に残る体験ができた、この経験をこれから糧としたい」と話していました。

また、今年が初めての参加となる一年生の中には、「のこぎりの使い方が難しかった、楽しい経験ができた、来年も来たい。」という生徒もあり、皆一様に満足した様子で作業を終了しました。



【2005年9月】

・木曽川・森づくりイン赤沢 「木曽川流域住民」による間伐体験で汗

森林整備を通じて、木曽川に関係する上下流住民の交流を図るイベントが9月3日、赤沢休養林で開催され、長野県内及び下流域の愛知、岐阜両県の人達約八十人が参加し、ヒノキ林の間伐作業や森林観察を体験しました。

冒頭、関中部森林管理局長から、「水の交流」、「木の交流」、「人の交流」をキーワードに、木曽川の国有林を通じた上下流の交流を図り、国民参加の森づくりを進めていきたいと言う挨拶がありました。

間伐作業では、蜂よけの網をヘルメットにつけるのが、初めてという人が多く、暑くて大変と言う声も聞かれはしましたが、作業に臨む姿勢は真剣そのものでした。

参加者は二人一組になり、息を弾ませながら一生懸命に鋸をひき、「倒れるぞ」という声と共に木が「どさっと」と倒れる音が森のあちこちに響き渡っていました。

また、自然観察会では、森林鉄道からの景色を楽しんだ後、やまぼうし自然学校の森林インストラクターの案内で赤沢自然休養林内での自然観察を行いました。

参加者からは、「森の歴史・御神木伐採の話し等勉強になった。」、「散策路も整備され、のんびりとした風景にも感動した。」、「山が好きなので自然の中で作業ができて嬉しい。来年も実施されるようなら是非参加したい。」といった意見も寄せられていました。



・ボランティア等による植生復元作業を実施

中央アルプス木曾駒ヶ岳の登山道周辺において9月30日、高山植物等の植生復元のための作業が、地元ボランティア等の協力を得て実施されました。

この活動は、当センターが取り組んでいる「自然再生推進モデル事業」の一環で、昨年度、航空写真等を基に木曾駒ヶ岳周辺において裸地化の著しい区域を特定したのに引き続き、本年度は調査の結果を踏まえ、実際の植生復元作業に着手したものです。

前日の天気が嘘のような晴天のもと、作業は信州大学農学部森林科学科の有志のほか、NPO日本高山植物保護協会、中央アルプスガイド組合、長野県、宮田村、駒ヶ根市など26名が参加して行われました。

参加者はまず、駒ヶ岳ロープウェーの終点千畳敷駅から背負子を使って植物繊維マットやマットを固定するための釘やハンマーなどを200m上の宝剣山荘付近まで運び上げ、その後、裸地化の特に著しい登山道周辺約200平米にマットを敷設しました。この植物繊維マットは、雨水や風による土壌の流出などを抑え、高山植物の発芽や生育を助ける目的で敷設されるもので、区域外からの植物が混入しないようあらかじめ熱処理を施したものを使用しています。

作業にあたっては、なるべく地面と密着するよう浮き石を取り除いたうえでマットを敷き、釘や取り除いた石により一枚一枚丁寧に固定するよう心がけました。最初は大部分の参加者が不慣れなこともあり、何度もマットを張り直しましたが、慣れてくるにつれ次第に作業効率も上がり、二時間ほどで全ての作業が完了しました。参加者は、一様に自分たちの作業の成果に満足した様子で、重い荷を背負った登りとは違った軽い足取りで現地を後にしました。

本年度の作業はこれで終了したことになりますが、当センターでは、ボランティア団体等との連携を図りつつ、来年度以降も引き続き植生復元に向けた取り組みを実施していく考えです。高山帯の植物群落を再生させることは非常に難しいことではありますが、花や緑いっぱいの山を取り戻すことを目標に頑張りたいと思います。

